

ご挨拶

貝塚市病院事業管理者 片山 和宏



平素より市立貝塚病院の運営に、格別のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。令和6年度の病院年報をお届けさせていただきます。

令和7年に入り、米国ではトランプ大統領が就任直後から今までにない政策を次々と打ち出し、また世界のあちこちで武力紛争が頻発しています。国内に目を向けると、7月の参議院選挙では、複数の新しい政党が頭角を現し、どこが今後のリーダーシップをとっていくのか先が見えない状況です。まさにVUCAの時代到来{変動性(Volatility)、不確実性(Uncertainty)、複雑性(Complexity)、曖昧性(Ambiguity)}を実感します。

医療業界も大きな変化の波に直面しています。医療内容の高度化に伴い、高額な医療機器や医薬品が増え、また物価もこのところ急激に上昇していますが、診療報酬はこれらにまったく対応できておらず、多くの急性期を中心とする病院群の経営をおおきく圧迫しており、当院も例外ではありません。

このVUCAの時代にあって、世の中の流れを読んだ対応の重要性が増してきています。2040年問題(75歳未満人口の減少・75歳以上人口の増加に伴い、当然疾患構造の変化が起こるため、慢性期～回復期に対応する施設が不足することが予想されている)に対しては、クリニックや介護施設・訪問看護ステーション・各病院の機能分化・連携の促進が大事です。また、生産労働人口の減少が今後ますます顕在化してくることが予想され、医療スタッフの働き方、やり甲斐をサポートする仕組みも必要です。最近のIT分野、特にAIの進歩は目を見張るものがあり、これらを取り組むことで仕事の効率化、働き安さを促進しようとする試み、いわゆるDXが医療業界にも浸透しつつあるようです。

上記の流れに対応していくことで、病院事業を発展させていきたいと考えています。

当院の理念であります「地域住民を支える良質な医療の提供」のために、課題はたくさんありますが、職員一丸となって市民病院の発展のために努力していく所存です。これまでと同様に、皆様方の温かいご支援、ご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

ご挨拶



院長 長谷川 順一

令和6年度の「病院年報」を発刊いたしましたので、お届け申し上げます。ご高覧いただければ幸甚に存じます。

市立貝塚病院は、基本理念である「地域住民を支える良質な医療の提供」を実現すべく、本年度も職員一丸となって診療・看護・地域連携に取り組んでまいりました。

地域社会は、かつてない速度で少子高齢化が進行し、医療・介護・福祉の一体的な体制が求められています。当院は、地域包括ケアシステムの要として、在宅療養支援体制の拡充や介護施設との連携強化を進め、住み慣れた地域で安心して療養いただける環境の整備に努めております。

診療面では、令和6年1月に導入した内視鏡手術支援ロボット「ダヴィンチ」が順調に稼働し、外科手術における低侵襲化と安全性の向上に寄与しております。また、HCUの運用強化とともに救急医療体制をさらに充実させ、急性期医療にも迅速かつ的確に対応できる体制を整えてまいりました。さらにICTを活用した診療情報の共有や電子カルテ機能の拡張により、診療の質と効率性の向上にも取り組んでおります。

一方で、病院経営を取り巻く環境はかつてないほど厳しさを増しております。人件費の高騰、物価上昇に加え、診療報酬の伸び悩みは全国の公立病院に重い課題を突き付けています。加えて、ウクライナ情勢やガザ地区の惨状に象徴されるように、国際社会は混迷と不安定さを深めており、その影響は我が国の社会経済にも及んでいます。こうした厳しい現実の中にあっても、私たちは使命を胸に、地域住民の健康と命を守るため、日々懸命に取り組んでおります。

市立貝塚病院は、地域の皆さまにとっての「最後の拠り所」となるべく、技術革新と人材育成を両輪として歩みを進めてまいります。困難な時代だからこそ、より強い覚悟と責任感をもって、信頼される病院づくりに努めてまいります。そして、こうした取り組みを支えているのは、日々患者さんと真摯に向き合い、地域医療を守り続けている職員一人ひとりの努力にほかなりません。この場を借りて、心からの感謝と労いを申し上げます。

今後とも変わらぬご理解とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。